

# 樋口一葉の世界

『たけくらべ』は、私たちにとってのできない子どもの時間がる物語である。る物語である。私たちは、古われた記憶の一わられた記憶の一齣一齣をとりや美登利に導かや美登利に導かれて、めいめを手ぐりよせる。を手ぐりよせる。彼らは明治のとともに、かつてとともに、かつて子どもであった私たちの原像のだ。

前田 愛

前田 愛(まえたあい) 1932年藤沢市生。東京大学文学部卒。現在立教大学教授。著書に『幕末・維新期の文学』(1972), 『近代読者の成立』(73), 『成島柳北』(76), 『鎖国世界の映像』(76), 『幻景の明治』(78), 『明治大正図誌(東京I・II)』(共編, 78)等。

---

平凡社選書62

樋口一葉の世界

1978年12月11日 初版第1刷発行

定 価 1200円

著 者 前田 愛

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1

郵便番号 102 振替 東京8-29639

電話 東京 (03)-265-0451

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社石津製本所

---

© 前田 愛 1978 Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料は小社負担)

# 樋口一葉の世界

前田 愛

平凡社



目  
次

I

閨秀の時代……………8

女流演説家の誕生 8

東洋のジャンヌ・ダーク 20

女権拡張の夢 30

明治の女書生 42

下田歌子……………52

一葉日記覚え書……………72

見えない手 72

第二のムラ 91

「厭ふ恋」 120

II

一葉の転機——『暗夜』の意味するもの——	140
『大つごもり』の構造	167
『にこりえ』の世界	194
『にこりえ』断想	225
十三夜の月	232
子どもたちの時間——『たけくらべ』試論——	250
あとがき	294
初出一覧	296

しばし文机に

頬杖つきておもへば

誠にわれは

女成けるものを

何事のおもひありとて

そはなすべき事かは

——みづの上



I

## 閨秀の時代

### 1 女流演説家の誕生

明治十五年四月一日、大阪道頓堀の朝日座で催された日本立憲政党史の政談演説会にひとりの妙齡の女性が参加していた。草間時福・古沢滋などの名ある弁士につづいてこの女弁士が白襟三枚重ねに島田雷のいでたちで壇上に上ると、そのしとやかな身のこなしに場内ではいっせいに拍手が起こった。掲げられた演題は「婦女の道」。高くはないがよくとおる声で諄々と説きすすめる彼女の男女同権論に、これまで女の演説を聞いたことのない聴衆はすっかり魅了された。湘烟女史岸田俊子の最初の演説である。

岸田俊子は文久三（一八六三）年、京都の裕福な呉服商の家に生まれ、幼いときから才媛の名をほしいままにした。九歳のとき、小学校で尊敬する女性を問われ、妾の理想とする女性は清紫の如き二名家にあらず、かの御女性の身をもって海外に経綸をのべ給うた神功皇后であると答えて教師

を驚かしたという話が伝えられている。明治十二年数え年十七歳になった俊子は、京都府知事と侍従山岡鉄舟に推薦され、文事御用掛として宮中に出仕することになる。書と漢詩文の才を見込まれて登用された俊子は皇后（のちの昭憲皇太后）に『孟子』を進講する役目を振りあてられた。この頃宮中には税所敦子や平尾歌子（のちの下田歌子）などの女流歌人が召し出され、若く聰明な皇后をめぐる平安朝をおもわせる文学サロンがつくられようとしていたのである。しかし、じっさいには多くの女官たちは無知と迷信にこりかたまっていて、国学の大家から『源氏物語』や『枕草子』の講義を聞かされても居眠りが関の山、皇后の質問にもはかばかしい答えを返すものは稀だった。それよりも、女官たちのややこしい人間関係こそ『源氏物語』の世界の忠実な再現にちがいはなかった。「皇后が病身で子がないところから、誰が皇子を生むかが問題で、女官に子供ができて無事に生まれないように、朋輩があらゆる妨害をくわえ」（山川菊栄『女二代の記』）たというのである。哺育係の女官が乳首まで鉛の白粉をぬり立てていたために、皇子が鉛毒に侵されてつぎつぎに幼い命を奪われたという陰惨な話も伝わっている。のちに奔放な男性遍歴と宮廷内における暗躍とから妖婦と呼ばれることになる下田歌子も女官生活の息ぐるしさに厭気がさして、俊子が宮中に入った明治十二年の秋に御暇を願い出た。歌子の父は山川菊栄の母千世に向かって「イヤどうも宮中という所はえらい所で、われわれのような田舎さむらいの娘ふぜいに勤まる所ではありません。御殿女中のひ

ねくれた意地の悪いのにこづきまわされて娘は病氣になってしまいました。お上から何んと仰せがあつても、二度とあんな所に私の娘は御奉公させません」と述懐したという。それでも下田歌子は八カ年の宮中生活を堪えとおしたのだが、岸田俊子はその半分にも足りない三カ年で病氣を理由に御用掛を辞している。結核で四十にも満たぬ若さで世を去った俊子の体力が歌子のそれに劣っていたか、慷慨の志氣が優っていたか、おそらくそのいずれも当たっているだろう。

俊子の志氣は「宮中新聞を読んで感有り」と題された漢詩にその一端が洩らされている。

宮中無一事

宮中一事無く

終日笑語類

終日 笑語類なり

錦衣満殿女

錦衣満殿の女

窈窕麗於春

窈窕 春よりも麗し

公宮宛仙境

公宮は 宛まなち仙境

杳々遠世塵

杳々として世塵を遠ざかる

幸有日報在

幸ひに日報の在るあり

世事棋局新

世事 棋局 新たなり

一読愁忽至

一読 愁ひ忽ち至る

再読涙霑巾

再読 涙 巾を霑す

廉士化為盜

廉士 化して盜と為り

富民變作貧

富民 變じて貧と作る

貧極還願死

貧極つて また死を願ひ

臨死又思親

死に臨んで また親を思ふ

盛衰雖在命

盛衰命在りといへども

誰能不酸辛

誰れか能く酸辛せざらん

請看明治世

請ふ看よ 明治の世

不讓堯舜仁

堯舜の仁に譲らず

怪此堯舜政

怪しむ 此の堯舜の政

未出堯舜民

未だ堯舜の民の出でざるを

岸田俊子が大内山の「仙境」を去って「世塵」のただ中に身を投じたのは明治十四年の秋のことである。保養をかねて民権運動発祥の地である土佐を訪れた彼女は、立志社社中の坂崎紫瀾や宮崎

夢柳らと交遊をふかめた。この鮮やかな変貌には世間知らずのお嬢さん育ちに許されたある潤達な勇気を認めていい。俊子と夢柳との漢詩の唱和は『高知新聞』の紙面を賑わせた。「春窓夜雨、湘烟女史の原韻に次ぐ」と題した夢柳の七絶をつぎに挙げておく。

可憐花向愁辺落　可憐の花　愁辺に向ひて落ち

相思詩於夢裏成　相思の詩　夢裏に於て成る

微雨夜来春一霎　微雨　夜来　春一霎まじ

重簾如水不堪情　重簾　水の如く情に堪へず

男勝りの女詩人と政治小説の名作『虚無党鬼啾々』の著者との交情は、民権運動史を彩る一挿話であるにちがいないが、夢柳が湘烟女史のイメージをかりてロシアの女テロリスト、ヴェラ・ザシユリッチを描き出したと想像してみることもちよっと愉しい仮定である。夢柳はもともと能書を謳われたが、湘烟と交わってからその書体がよく似てきたのであらぬ艶聞を取沙汰されたといわれる。

じっさいは湘烟には母の竹香女史がお目付役で付添っていたから、夢柳がこうむった嫌疑も濡衣にすぎないが、土佐の立志社社員との交歓が、彼女の抑圧された性を解き放つきっかけとなったこ

とは否定できない。

かれらとの交友によって政治的識見がどれほど深められたかは疑わしいにしても、湘烟の男女同権論は女だけの世界に囚われていた彼女じしんの解放のよろこびに裏打ちされていたかぎり、ある真実の響きを伝えていた。美しい十二単ひとえに包まれた女官たちの不幸が、すべての女性の不幸に通じていることを自覚したときに、彼女の同権論は離陸しはじめるのである。

大阪道頓堀での処女演説を皮切りに、湘烟は約二年間にわたって全国各地の遊説旅行を続けることになる。閨秀演説家としての湘烟は、自由党にとっても貴重なタレントのひとりにちがいがなかった。演説そのものが、文明開化とともに誕生した新しい視聴覚文化の形式だったのである。現在残っている湘烟の肖像写真は豊艶とはいいがたいが、痩せぎすな身体、細面によく輝く瞳が特徴的で、清楚な佳人の印象である。「報知新聞」の記者が「岸田は顔よりも声が善い」という後藤象二郎の言葉を引き、「女史の声や泉の涓々として流るゝ如く最も涼し」(『報知新聞』明治32・4・16)と評しているように、その容姿もさることながら、よくとおる声が演説家としての湘烟の有力な武器になった。しかも大阪では文金高島田、緋縮緬の着物に黒縮緬の帯というお姫様スタイル、京都その他では黒・白・赤の三枚重ねと土地柄にあわせて衣裳をかえたといわれているように、湘烟じしんもショウ的要素を充分計算に入れていたと見ていい。あるいは呉服屋の女主人であり、マネージ

ヤーとして湘烟に随行した母親竹香女史の演出を考えていいかもしれぬ。

明治十五年五月、湘烟ははじめて地方遊説に参加し、十三日、十四日の両日にわたって岡山で演説を試みる。五月九日の『山陽新報』は、「大阪の政談演説会に於て懸河流水の弁を掉たひ、名を遠近に轟とどりたる岸田とし女史には一昨日岡山に來られたるよし」と報じ、ついで十二日の同紙には「政談演説会、來ル十三日、十四日、午後七時ヨリ東中山下心明座ニテ開會 演者 林包明 岸田とし女 小林樟雄……但通券定価三錢……」という趣旨の広告が掲載された(村田静子『福田英子』)。湘烟の演題は初日が「政府は人民の天男は女の天」、二日目が「夢の説」「岡山県女子に告ぐ」であったが、その女權擴張の呼びかけに深く感動したひとりに、このころ母や兄とともに私塾蒸紅字會を経営し、婦女子の啓蒙運動にしたがっていた景山英子がいる。湘烟といっしょに演壇に立った自由黨員小林樟雄は、英子の親友小林真女の兄だったのである。

其歳有名なる岸田俊子女史(故中島信行氏夫人)漫遊し來りて、三日間(これは英子の記憶の誤り)吾が郷に演説会を開きしに聴衆雲の如く会場立錫の余地だも余さざりき。實じつにや女史がその流暢りゅうちやうの演説もて、滔々たうたう女權擴張の大義を唱導せられし時の如き妾も奮慨おく能はず、女史の滯在中有志家を以て任ずる人の夫人令嬢等に議はかりて、女子懇親会を組織し、諸國に率先して、



婦人の団結を謀り、屢々志士論客を請じては天賦人權自由平等の説を聴き、をさをさ女子古来の陋習を破らん事を務めしに、風潮の向ふ所入会者引きも切らず、会はいよいよ盛大に赴きぬ。

(「妾の半生涯」)

湘烟の来遊をきっかけに結成された岡山の女子親睦会は、上森操・竹内寿・津下象など同郷の有力婦人を主要メンバーとして、五月中に第二回の会合を開き、三十余名の参加者を得た。席上女漢学者の上森操は漢文で書かれた湘烟慰勞の書簡を朗読し、ついで「日本古代の事蹟に遡り、其の事蹟を証憑として日本は元來女子を重ず可き国なりとの意」を演説したという(『朝日新聞』明治15・5・31)。景山英子の活動が新聞の紙面に現われるのはこの年の九月ごろからである。

この岡山の女子親睦会をはじめとして、景山英子の親友で日本最初の女新聞記者となった播州竜野の富井於菟、『こわれ指輪』『下ゆく水』などの佳篇を残し、景山英子と大井憲太郎の愛を争った小説家の清水紫琴など、湘烟の遊説に励まされて自立の道を歩みはじめる女性たちは全国各地にぞくぞくと現われることになるだろう。京都八坂新地の芸妓が自由講を結成して湘烟を招く計画を立てたことも伝えられている(『南海日報』明治16・10・23)。

湘烟の演説を集大成したと見られる論文「同胞姉妹に告ぐ」(『自由燈』明治17・5・18(6・22))に